18

ナチスの「安楽死」作戦とミュンスター司教フォン・ガーレン

泉　彪之助

ナチスは、精神疾患患者・遺伝性疾患患者を「生きるに価しない生命」、「民族の浄化」という理由をつけて、集団的に殺害した。いわゆるナチスの「安楽死」作戦である。この暴挙に強く抵抗したのはドイツのキリスト教聖職者であり、もっとも影響が大きかったのは、「安楽死」作戦を批判してミュンスター司教フォン・ガーレン伯爵が行った公開説教であった。

わが国では、ナチスに対するキリスト教聖職者の抵抗のうち、福音主義領邦教会（プロテスタント）に関するものが注目されており、「安楽死」作戦批判と関係が深いカトリック教会側の抵抗についてあまり知られていない。

演者は、ナチスの「安楽死」作戦の基礎にある「生きるに価しない生命」という考えを医学倫理上の重要な問題と捉え、フォン・ガーレン司教の公開説教がどのように行われたか、詳しく知りたいと考えた。そのため、昨年ミュンスターを訪れ、フォン・ガーレン司教とその公開説教について調査を行ったので、その結果を報告する。

ナチスの「安楽死」作戦について、日本医史学雑誌で紹介した小俣和一郎氏の著書があり、その後、松下正明教授によってエルンスト・クレーの基本文献が翻訳されているので、詳細は省略する。一九三九年より精神疾患患者・遺伝性疾患患者を対象として行われ、ドイツ国内では精神疾患患者はグラーフェネック、ハダマールなど六箇所の集団殺害施設へ移送され、そこで殺害された。

これに対し、ドイツのキリスト教聖職者は、種々の形で抵抗した。ミュンスター司教（後に枢機卿）クレメンス・アウグスト・フォン・ガーレン伯爵はナチスの行為を批判する三回の公開説教を行い、一九四一年八月三日にミュンスターのランベルティ教会で行った第三回の説教において、「安楽死」作戦をきびしく非難した。この公開説教の内容は、ひそかにドイツ全土に配布され、海外

にも知られた。これに対し、ナチ党および政府の一部はフォン・ガーレン司教を直ちに処刑せよと主張したが、ヒトラーはミュンスター司教区民、ウエストファーレン州民の反発を恐れてフォン・ガーレン司教を処分することができなかった。この公開説教の影響で、集団殺害施設は閉鎖されたが、その後も各病院などで秘密裏に殺害が続けられた。「安楽死」作戦の犠牲者数は、約一五万人とされる。

戦後、フォン・ガーレン司教は枢機卿に任命されたが、まもなく死去し、ミュンスターの聖パウルス大聖堂に葬られた。後にローマ教皇ヨハネ・パウロ二世はこの墓に詣でた。

説教が行われたランベルティ教会は、ミュンスターの中心に立つ堂々たる大教会である。ナチスを批判した三回の説教全文は、小冊子として聖パウルス大聖堂で配布されているが、この文面と比較すると「安楽死」作戦批判の説教の邦訳は一部が省略されている。説教で、フォン・ガーレン司教は「殺してはならない」という十戒第六戒の文言を繰り返しのべ、機械や家畜なら不要になったら処分することもできるが、人間には許されない。人間を役に立たなくなったら処分するというのなら、高齢になったもの、戦争や労働で廃疾者になったものはどうするのか。民族や国家という偶像を神の上に置くことによって、この掟を破ってはならないと警告している。フォン・ガーレン枢機卿の「安楽死」作戦批判の基礎にあるものは、キリスト教信仰とくにカトリック倫理であり、その信念を私たちも学ぶべきであろう。

（介護老人保健施設　陽翠の里）